

としているため、比較的安定的であるが、市に染色工業が発達しておらず、そのほとんどが中間商品として（白地のまま）、京都などに出荷されているという状態で、付加価値が低い。九谷焼工業については、後継者となる若年・青壮年層の労働力不足が深刻な問題となっている。また、市の工場が、そのほとんどが自然発生的に立地したもので、市街地の中心地や住宅街にも工場集積が著しく、近年、安宅地区などの郊外への工場移転が計られている。

陶器産業の地域性

— 信楽・備前・丹波の比較研究 —

鈴木朝子

(1) 目的

信楽・備前・丹波の窯は中世六古窯のうちでも、一時としてとだえることなく、さりとて大産地化または大企業化することもなく、8世紀以上に渡って続いている窯である。これらの伝統陶業のあり方は、各地域の環境とそれへの人間の対処のし方を濃厚に反映していると考えられる。その発達にはどのような要因が係わり、それによってどのような陶業が生まれたか。また、現時点で、各陶業の異質性と共通性はどのように捉えられるか、今後の本質的な問題は何か。

(2) 方針

まず、各陶業地域を比較地誌的に論じた。特に「現在の陶業」を論じるためには、信楽については文献と諸統計から、備前については15製陶業者を含む各方面の方々への聞き取り調査から、丹波については47製陶業者を含む陶業地域内の55世帯へのアンケート調査から、資料を得た。最後に、現代的観点から、異質性・共通性及び問題点を探った。

(3) 結果

伝統陶業の成立要因は、(i)原料土、(ii)燃料、(iii)築窯適地としての傾斜地、である。次に、発達要因は、(i)各陶業地の位置と交通の条件、(ii)他産業への依存度、(iii)中世末から近世における権力者の庇護、(iv)原料土の性質と量、(v)明治以降の内部的努力と外部的援助、等である。これらの発達要因は、同次元で働いたものではなく、歴史とのかみ合いの上で理解されるべきである。

各陶業地における(i)～(v)の方向性に従って発達した各陶業の、現代における異質性は2つの観点からまとめられる。

(i) 陶業及び陶業地域内の性格

信楽陶業は、工業製品を基盤に置き、多くの零細・小企業と強力な組合組織と指導力のある窯業試験場によって展開されている。

備前陶業は、工芸品を対象とし、個々人が一品制作の形で営むのが基本的である。そこでは厳しい個性の競争が演じられている。

丹波陶業は、景気に応じて浮動的である。組合を通じて生産・流通体制を強化することもなく、外部の援助も得られず、零細業者が半農半工の形で営んでいる。社会的には血縁関係が濃く、このため

業者間の激烈な競争は目立たず、微妙な協力の中で展開している。

(ii) 自市町との関係

信楽陶業は、信楽町において経済性も労働力収容性も高く、名実共に町を支えている。

備前陶業は、備前市の文化と観光の資源であり、市のひとつの象徴である。

丹波陶業地域は、今田町の他集落の傾向からかなり遊離しており、交流が少ない。町当局から、特別の扱いを受けていない。

基本的にはかくも異質化した各陶業の共通性はどこに見出せるか。最近は、経済成長と共に庶民生活が向上し、非実用的な陶磁器製品への一般の関心が高まった。また、信楽や丹波の山間地もようやく交通条件が改善され、都市との位置的近接性が発揮されるようになった。共通性は、生活の経済的余裕と生活空間の拡大によって起こった焼物ブームに伴う、各陶業の変容の中に見出せる。各陶業地とも、伝統性によって全国的観点から人気のある場所になっている。

伝統陶業として続かための本質的な問題点は、人文条件的なことよりむしろ、各地での原料土の開発であろう。その個々の性質が各陶業のパターンを多く決定しているから。

箱根火山カルデラの水文環境

中 島 直 子

(1) 目的

107.8Km²の箱根カルデラの水文環境を研究し、カルデラに位置する観光地“箱根”の水不足の実体を明らかにする。

(2) 方法

箱根町が水不足なのは、火山体上に位置するため、年降水量3,000ミリあるにもかかわらず、熔岩中への浸透が多いためであろうと推測し、次のようなやり方で進めた。

イ) カルデラからの唯一の河川、早川の流出量と降水量の割合を考察する。

ロ) 水道使用量、温泉使用量などを調べる。

ハ) カルデラ水収支を計算する。

(3) 結果

イ) 早川の年流出率(年流出量の年降水量に対する割合)は、1970年の風祭測水所流量と仙石原の降水量を使用すれば76.7%であった。降水量の23.3%に相当する非流出量は、蒸発散量に使用されたと考えられる。

ロ) 早川の月別流出率は右表の如くであり夏に小で冬に大であった。これらの値から、降水は夏に貯蓄され、冬に流出する傾向をもつ地下水と考える。

ハ) 1976年7月10日から同年8月31日までのカ

月	流出率	月	流出率
1月	0.838	7月	1.102
2月	1.375	8月	0.578
3月	1.266	9月	0.528
4月	0.432	10月	0.696
5月	0.633	11月	1.297
6月	0.554	12月	2.217

(1970年)